

ヘルマプロディトス

II

両性具有の景色

Hermaphroditus

SEIDOU

正道



# 目次

ヘルマプロデイトス II	
全体の目次	3
第5章 聖母と神秘主義者（座標9）	
（1）女性側の視点しての「聖母」	5
（2）ヘルマプロデイトスとしての神秘主義者	9
第6章 アナトとパール	
（1）聖母たちの系譜	15
（2）聖母アナト	16
（3）神秘主義者たちの言葉	19
第7章 ディオニュソスとアリアドネ（座標0）	
（1）特徴のない虚無	24
（2）避妊についての考察	28
（3）避妊がうむ国家衰退	29
第8章 シヴァ	
（1）ミトラスと暗闇と太陽	33
（2）ヒンズーの神の三位一体	34
（3）活躍しない主人公	37
第9章 アダムと肋骨（座標10）	
（1）存在と現象	40

(2) 現実と理想 . . . . . 42  
(3) 女性とルベド . . . . . 44

**第10章 エメラルド板**

(1) ヘルメス・トリスメギス . . . . . 47  
(2) エメラルド板の全貌 . . . . . 50  
(3) エメラルド板の解釈 . . . . . 51

**ヘルメティック・トリニティを結ぶにあたって**

三部作の完結 . . . . . 55

**付録**

茨城県知事選挙に関して . . . . . 58

ヘルマプロデイトス  
II

## 全体の目次

- 序説1 ヘルマプロディトスとは何か
- 序説2 ヘルマプロディトスの神話
- 第1章 妊婦と胎児（座標1）
- 第2章 カインとアベル
- 第3章 ビジネスマンとキャリアウーマン（座標5）
- 第4章 リリト
- 第5章 聖母と神秘主義者（座標9）
- 第6章 アナトとバール
- 第7章 ディオニュソスとアリアドネ（座標0）
- 第8章 シヴァ
- 第9章 アダムと肋骨（座標10）
- 第10章 エメラルド板

ヘルメティック・トリニティを結ぶにあたって

## 第5章

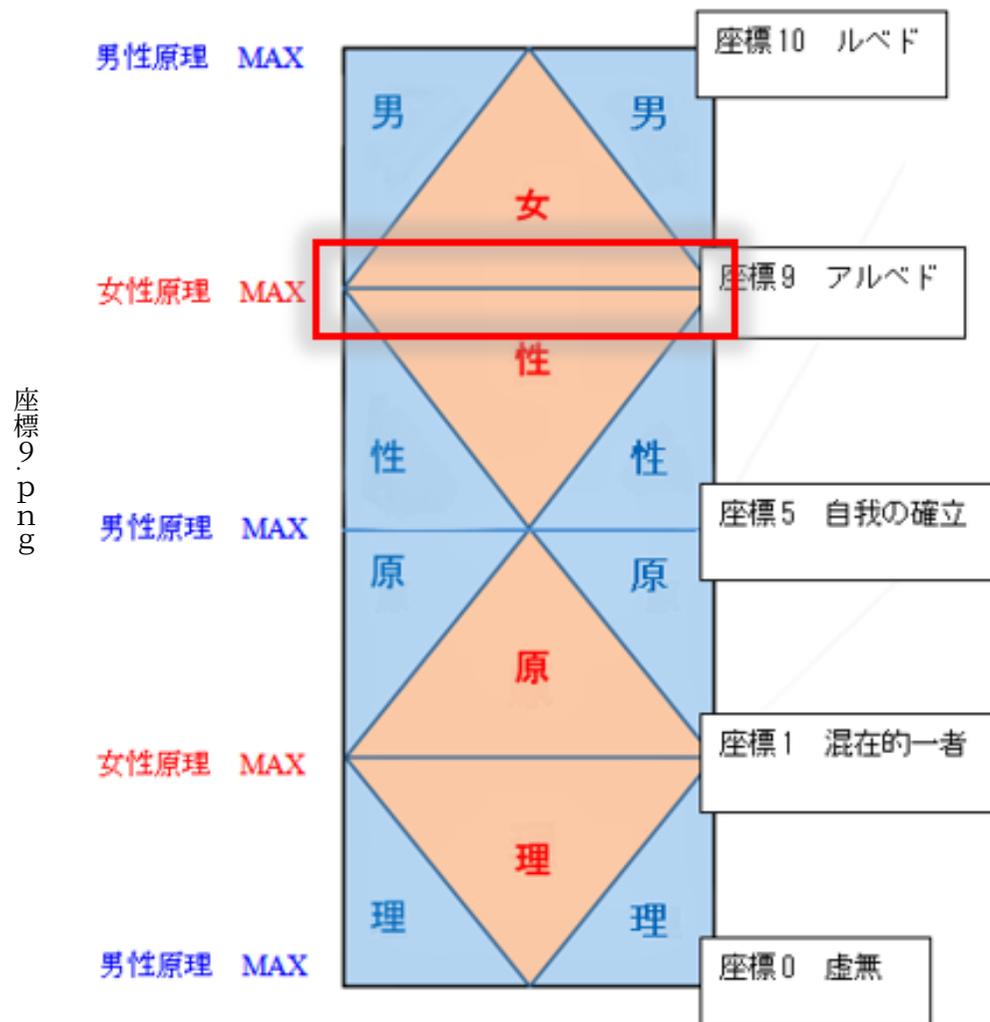
### 聖母と神秘主義者（座標9）

（1）女性側の視点としての「聖母」

理想的女性像

ここでも原理図を眺めることから始めたい。

# 原理図



そうしてみると、明らかに、赤い四角で囲まれた範囲の大部分がピンク色である。これは論述の対象となるのが、ほとんど完全に、女性原理によって占められた領域であることを示している。

事実、座標5において男性化した女性は、自身の本来性（≡女性性）を取り戻すという形で、ヘルメスの杖という梯子を登っていく。

彼女の心的態度は、意識的能動性（自我の確立段階）から、無意識的な受動性へと変化していく。これに関しては男性側も同様であるが、要するに、彼女のもとに、しだいに「アルベド侵入」が起こるようになるということである。すなわち、

「どうして、自分にこんなことが出来たのだろうか」

と思わずにはいられないような、他我的な助力を得られるようになるということだ。

そのような不思議が日常化するあたりが「アルベド侵入の中期」であり、さらに、その不思議を不動化、固定化できるようになると「アルベド侵入の後期」に入っているとと言えるだろう。

そして彼女は、恩寵の原理を経て、アルベド自体の体験をすることになる。

それは無限と永遠という「存在そのもの」と一体になることである。換言すれば、空間の全て、時間の全てと結合する、きわめて女性原理が増強された状態である。というのも、女性原理とは「結びつけること」だからである。

しかし、このような成長ルートを辿れるのは、文筆や絵画など、何らかの芸術的な専門職を持っている女性に限られるのではないだろうか。ある意味で「男性たちと競争するような世界」あるいは「男性的な世界」で生きている女性たちでないと、体験できない事例であると思われるのだ。

というのも、そのおかれた立場に「分化↓総合」という流れの要素が弱いと、総合的一者たるアルベドに近づけないからである。そういう意味では、とりわけ男性的な職業である、政治や軍事の世界で、女性アルベディアンが誕生する可能性は高い。

ただし、これに歴史的なサンプルには乏しく、正直ここで紹介できるような事例にも思い当たらなかった。パッと思い浮かぶのは、政治家のマーガレット・サッチャーと軍人ジャンヌダルクぐらいか。

### 修道女に見る座標9

そこで私は、ここで修道女たちに注目したいと思う。ドンピシャのサンプルではないのだが、彼女たちの数は多いし、その生きざまが、実にアルベド的なものだからである。

修道院に入るさい、彼女たちは「清貧、貞潔、従順」の誓いを立てることになる。清貧は、私有財産を持たないこと。従順は、長上の命令のなかに神の御旨を見ること。そして貞潔とは、独身生活を貫くことを意味する。

ここでは、そのなかの「貞潔」に注目したい。修道女であるかぎり、彼女は独身を貫かなければならぬ訳であるが、実は、これは正確な物言いではない。というのも、修道女は「結婚はする」からである。

ただ、その結婚相手となるのが、一般に考えられているような男性ではないだけなのだ。すなわち修道女は、主イエス・キリストと結婚するのであり、彼女らは「キリストの花嫁」となるのである。

したがって、修道女たちは理念的には既婚者なのであり、それだからこそ、他の誰とも結婚することが出来ないのである。

### 靈的な結婚、靈的な母性

しかし、これは当然「肉身の結婚」ではない。夫であるイエス、三位一体の神であるイエスが「神は靈である」と言った以上、この結婚は「靈的な結婚」なのである。

これは、第三福音書において、私が、聖母マリアの母性を「靈的な母性」と呼んだ一節に、限りなく近づいた立場である。靈的な結婚は、靈的な子供を生みだし、そのとき母親たる修道女は「靈的な母性」を身に着けるだろうからである。

いや、もちろん、そこまでストレートに話がすすむ事例ばかりではないだろう。修道女の中には、かかる結婚の靈的な次元に、心の底ではどうしても辿り着けない人もいるに違いない。むしろ、そのような修道女のほうが多いかもしれない。

しかしながら、あえてここでは、理想的な状態だけに話を限ることにしよう。

### 修道女にとっての我が子

そうしてみると、靈的な母性を身に着けた修道女にとって「我が子」となるのは、むしろ肉肉の子宮で結ばれた子供ではありえない。いわゆる一般的な「我が子」が対象ではないということだ。

そうではなく、彼女にとっての「我が子」とは、母性的な助けを求めている、ありとあらゆる人間となる。そこに枠があるとすれば、修道女の恩恵を受けるのが「キリスト教の信徒であること」ぐらいだろう。

だが、一昔前の西欧であれば、クリスマスチャンでない人間など、ほぼいなかった。そして貧困に悩んでいる人々、あるいは孤児などは、いつのまにか修道院の周りにたくさん集まってくる。よって、修道女が彼らに接する機会は、いくらでも発生する。

こうした人々に母性的な優しさを注ぐとき、彼女の母性は「パーソナルな空間性」を超えることになる。つまり、彼女の母性は、より普遍的なものとなる。

これは、まさにアルベドの化身としての「聖母」の似姿の現出であろう。貧しき人々は、このような修道女を求め、たとえ口にはしなくとも、彼女を聖母として讃え、かつ慕うのである。

## （2）ヘルマプロデイトスとしての神秘主義者

### 両性具有の担い手

あらためて確認するが、座標9とは「アルベド自体」の高さのことである。そして原理図を見れば明らかのように、アルベドは、混在的二者（座標1）とともに、女性原理の性質がもっとも強く表れる座標である。

この座標に男性が定位するということは、当然そこに「両性具有の様相」が生じるということだ。よって、この座標におけるヘルマプロデイトスは、基本的に男性が担うことになる。

では、ヘルマプロデイトスである彼は、どのようにして女性原理と共存するのだろうか。

結論から先に言えば、それは「成人男性の、精神的胎児化」によって成されるということになる。

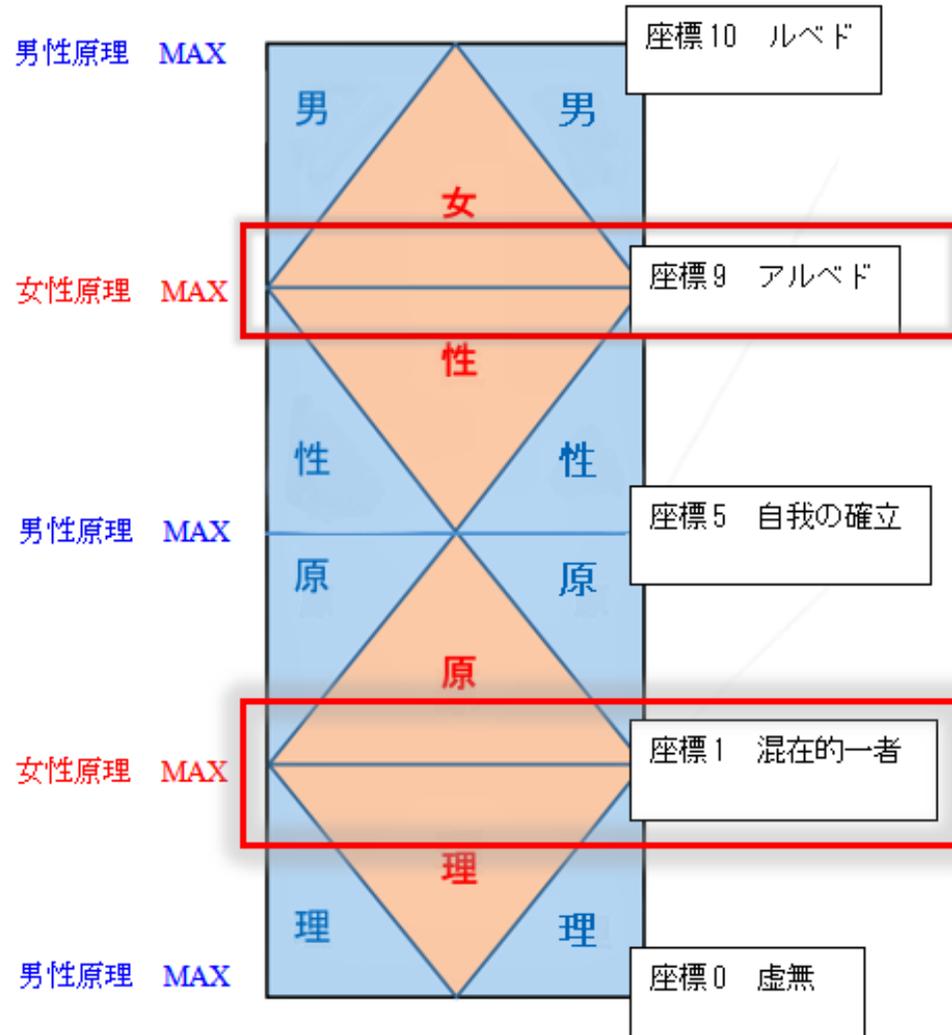
### 座標1のモデルアップ

すでに何度も引用しているが、エメラルド板という、錬金術の根本聖典には「上にあるものは下にあり、下にあるものは上にあり」という文言がある。

そして、この上下の中央にあるのが「座標5」という、人体（＝ネチェリケト）にたとえば「ヘソ」にあたる座標である。

このヘソを転回点にして「座標1」の内容は、再度「座標9」として現れる。下にあるものは上にあるものの如し、だからである。

# 原理図



座標9用の特殊原理図.png

これを換言すれば、混在的一者の内容が、自我の確立を通過し、アルベドとして再発現されるということだ。ただし、混在的一者の内容が、高位の座標にふさわしい「モデルアップを経て」であるが。そうしてみると、座標9において女性原理として表れるのは「霊化された母胎」に他ならない。それは言わば「信徒を我が子と思いつながりながら愛する修道女」を、さらに高く格上げしたような存在である。つまり、人類そのものを我が子としながら、彼らに「霊的な子宮」という住まいをも提供する霊的な母親——それが「座標9で現出する女性原理」なのである。

この霊的な子宮に貫入することによって、男性は、母体とひとつのボディを共有する。そうして妊婦様式のヘルマプロディトスを成立させるのである。

### 男性の胎児化

では男性が「霊的な子宮」に貫入するためにはどうすればいいのか。

そのためには、彼は胎児になるほかない。子宮内に在ることを許されるのは胎児だけだからである。ただし、ここで語られているのは、肉体上のことではなく、どこまで行っても精神的なことである。したがって彼は「精神的な」胎児とならなければならない。錬金術に登場する人造人間ホムンクルスは、この精神的胎児のアレゴリーだと思われる。

この精神的胎児になるための通過儀礼が、根源苦に押し込められることで主体が矮小化する「ニグレド」である。

ただし、このニグレドは「闇化⇨虚無化⇨座標0」のニグレドではなく「黒化⇨座標9における座標5の再現」のニグレドであることには注意してほしい。

詳しいことを知りたい読者には、第二、第三の福音書を読み返していただくしかないが、私は二種類のニグレドを設定したのである。ここで取り上げているニグレドは、第一次のほうのニグレドである。

それはさておき、根源苦による矮小化は、より人間的な象徴として眺めれば「胎児化」に他ならない。彼の精神は、いまや胎児のように小さくなったのである。

もうすこし具体的にイメージしたいならば、墮胎されてトレーの上に乗せられた胎児が、そこでピクピク震えているところでも想像すればいい。

むろん喋ることは出来ないが、もし口をきかせたならば、この胎児はきつと寂しいと言っだろうし、虚しいと言っだろう。また心もとないこと、この上もないだろう。

このように憐れむべき心情が、ニグレドの体験をしている男性のもとには、たしかに訪れることになる。

### アルベドという女神の登場

ここでも前項のイメージを、続けて利用することにしよう。

では、そうした——トレー上の胎児という——憐れむべきシチュエーションに、豊かな母性にみちた

「女神」が現れたならば、彼女は一体どのような行動をとるだろうか。

人間の女性には出来ないことだが、女神である彼女は、きっと次のようなことをするだろう。すなわち彼女は、まだ僅かに生命をつないでいる胎児を、迷うことなく、自分の子宮のなかに押し込むのではないだろうか。そうして、自分の庇護下で、胎児の生命力を甦らせようとするのだ。

ただし、肉身の妊婦が、胎児を体外に押し出すものなら、霊的な妊婦（女神）は、胎児を体内に押し入れるものなのである。胎児はそのとき、女神の子宮の中で、ようやく心から憩うことになる。

かくして、ここに「霊的な妊婦」という形で両性具有が成立することになる。もともと妊婦とは、一つの体のなかに、二つの性を包含することが出来る存在である。

### イエスとニコデモの会話

重ねて言うが、右で述べてきたことは、あくまでも霊的な話であって、肉体的なものではない。当然、子宮に遡行するための産道だって、霊的にはあり得ても、肉体的には存立することが出来ない。そのような事情があることは否めない。

二〇〇〇年前、このような事情を知る由もない相手と「会話」しなければならなかったイエスこそ、我々は憐れんでやるべきだろう。

——イエスは答えて言われた。

「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」

ニコデモは言った。

「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」

イエスはお答えになった。

「はっきり言っておく。だれでも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」

以上は『ヨハネによる福音書』からの引用である。本書によって「座標9」におけるヘルマプロデイトス化」の事情を知った読者諸君は、もうニコデモのような外的な質問をすることはないだろう。

### 神秘主義者の営み

ともあれ霊的な胎児は、アルベド（霊的母体）と一体になることによって、その母体が持っていた情報を共有することになる。

それは虚無に準じるほど僅かな時間における「情報共有」であるが、その情報の価値の高さには、ま

さに計り知れないものがある。というのも、アルベドという母こそは、無限と永遠とを知悉する、偉大な神的存在であるからだ。

そのため人間の世界に戻った胎児は、その胎児なりの舌足らずさをもって、かの価値たかき情報を、人々に公開しようとする。

これが、いわゆる神秘主義者の営みなのである。

彼らは口々に無限や永遠について語るが、その口ぶりは、つたないの一言に尽きる。情報の確かさは、母体と一体化していた時とは、もはや比べ物にならないほどに低劣化してしまっている。

そのため神秘主義者の言葉は、総じて断片的であり、体系的であることから遠く隔たってしまっている。

しかしそれも「妊婦としてヘルマプロデイトス化していた胎児が、いまは母体から切り離された状態で回顧陳述しているのだ」と考えれば、むしろ仕方ないことだと思えてくるのである。

## 第6章

### アナトとバール

## (1) 聖母たちの系譜

### マリア以外の聖母

アルベド（座標9）に関しては、その人格的象徴として、私はいつも聖母マリアを挙げてきた。これまでずっと「再臨のキリスト」に関する文書を執筆してきたのだから、そこでマリアに言及すること自体は、ごく自然なことだと言っているだろう。

しかし、本書では、すでに「カインとアベル」「リリト」など、これまで私が触れて来なかった人物に、スポットを当ててきた。であるならば、ここでも聖母マリア「以外」の女性を挙げるべきではないだろうか。

しかも、それは決して難しいことではない。その事例は数多くあるからだ。次の文章を読んでいただければ、それは火を見るよりも明らかだろう。

なお、文中の処女童子とは、処女が生んだ子供という意味である。となれば「処女懐妊Ⅱ霊的な母性Ⅱ聖母」と同じカテゴリーに属する言葉と考えてよいだろう。

—— 処女童子というのは、ユダヤ教以外の古代宗教に見られた信仰の一類型であった。

たとえば、三世紀にエジプトの太陽神は国王のために処女の妃を生んでいる。インドでは仏陀は処女から生まれており、ペルシアではツァラトゥストラは処女童子として崇拜された。

ギリシアのヘラは処女のままヘファイストスを出産している。またプラトンも処女の息子とされた。ヘラクレイトス崇拜には、神の母は処女であるとする信仰があった——

上山安敏『魔女とキリスト教』より

そういう訳で、世に聖母は数多といるのであるが、ここでは「アナトとパール」に着目したいと思う。アナト（聖母）はともかく、パール（子）の名は本書の読者ならば、おそらく八割がたは知っているだろう。旧約聖書でおなじみの、あの有名な邪神の名前である。

### 邪神としてのパール

旧約聖書で、とくにパールの名がクローズアップされているのが『列王記』の中のくだりである。

登場人物は預言者エリヤと、パールを崇める四五〇人の神官たち。彼らはそれぞれ、薪の上に、裂いた雄牛を載せた。この雄牛が燃やされれば「燔祭」の形式が整う。燔祭とは生贄を燃やし尽くして神に

捧げることだ。

だが彼らは、そこに不可欠な「燃やすための火」は取り扱わない。それはエリヤが、「あなたたちはパールの名を呼び、私は主の名を呼ぶことにしよう。天から火をもって答える神こそ、本物の神であるはずだ」と言ったからだ。

民衆が見守るなか、パールの神官たちは、朝から昼まで「パールよ、我々に答えてください」と祈った。が、いっこうに何も起こらない。

それを冷やかな視線で眺めていたエリヤは、薪と雄牛に水を注いでから「主よ、私に答えてください」と叫んだ。エリヤは祭壇をびしょ濡れにすることで、不正行為や自然発火など絶対に起こらない状況をつくったのである。

すると即座に、空から火の玉のようなものが降ってきた。そうして、その火の玉が、雄牛と薪とを、もうもうと焼いたのだった。それは明白な超自然現象だった。

民衆は驚愕して「主こそ神です」と口々に叫んだ。

そこでエリヤは民衆に「パールの神官たちを捕らえよ。一人も逃してはならない」と指示を与える。それにより民衆が神官たちを捕らえると、エリヤは川辺で彼らを皆殺しにしたのだった。

## (2) 聖母アナト

### 恵みの神としてのパール

右の話からは、悪者でやられ役のパールの姿しか伝わってこない。だがウガリット神話におけるパールは、それと大きく異なる肯定的役割を持っている。なんと、そこでのパールは「慈雨による恵みの神」なのである。

まず、私たちは中東の、なかば砂漠化した風土を思い浮かべなければならない。そうした乾いた環境の中では、雨こそが最大の「人間にとっての恵み」となる。

このような背景にあって、パールは「雲に乗る者、稲妻と雷雨の神」と呼ばれる。よって彼は、乾いた地における善なる神である。

そのパールの敵役となるのが、彼の弟である「モト」という神だ。このモトは火の神であり、大地をカラカラに干上がらせる力を持っている。ただでさえ暑い砂漠に住む民にとっては、厄介至極な悪神ということになる。

パールとモト——この兄弟は激しく戦いあい、ついにパールが敗北して死んでしまう。これは雨が衰え、陽光が盛んになるということだ。そのため大地は干上がり、カラカラの荒野になってしまった。

## アナトの登場

ここで登場するのが、パールやモトの妹であるアナトである。パールを慕う彼女は、兄の亡骸を探しもとめて、ついに野に倒れているパールの死骸を発見する。

アナトはパールを埋葬し、冥界にくだった兄のために生贄を捧げた。生贄は、多くの雄牛や羊などである。

と同時に、悲しみの処女アナトは、モトを糾弾して「パール兄さんを返して！」と訴える。しかしモトは「絶対権力者となった自分に対して、お前はなんと不遜な態度をとるのだ！」という感情で怒り出す始末。まったく話にならなかった。

そこでアナトは、モトに対する復讐を決意する。彼女は少女をおとりにして、モトを捕らえると、そのモトの体を引き裂いた。さらに火で焼き、臼でひいて野に撒いた。小鳥たちが、その死骸の屑をついばんだという。

ここまでやったおかげでパールは、モトの支配下（＝死）から逃れることが出来たのだろう。パールやアナトの父であるエルという神が、夢のなかで雨の景色を見た。

「天の油が地に滴りおちて雨となり、涸れ谷に蜜があふれはじめた」

のだという。そして父エルは娘に言う、

「アナトよ聴け、今やパールは生きている」と。

パールは戻ってきた。が、それと同時にモトも再生した。かくて二人は毎年戦いあい、右の物語を繰り返すことになる。

——パール神話にみる死と再生のドラマには、明らかに季節の交替のドラマがある。パールが倒れるとモトが支配し、モトが倒れるとパールが支配する。

この交替のドラマのなかで、雨季と乾季が交替し、播種の季節に収穫の季節が継起する。パールの再生は雨季の開始、モトの支配は乾季の開始の宣言である——

山形孝夫『聖書の起源』より

## 妹という聖母的存在

以上がパール神話のあらましであるが、ここで私たちが注目すべきは、パールの妹であるところのアナトである。

さしあたって、この「妹」という立場は、彼女の兄に対する愛情を、必然的にプラトニックなものにする。兄妹同士であれば、その好意が性欲に結びつくことは滅多にないからだ。

つまり、女が男を愛しているのに、その愛が、肉体的な次元から自由となるのである。これは「母親（女）の息子（男）に対する愛」と、ほぼ等質であると言えるだろう。

したがって、マリアが聖母であるように、アナトにもまた、聖母の要素が含まれていることになる。肉の愛（座標1）から離れた、精神的（＝霊的）な愛は、その主体が座標9（聖母の座標）まで高まる可能性を秘めているからである。

しかも、バールの「死と再生」は、まさにこのアナトの力によって行われるのである。それは神話を読めばすぐ納得がいく。バールを死の鎖から解放したのは、モトを完膚なきまでに打倒したアナトなのであるから。

つまりアナトは、自身の力によって、一度死んだバールを「この世に生みだした」のである。ここにアナトの「母」の性質が見られると言えるだろう。

これによってアナトは「聖母アナト」と呼ばれるに足る資格を持つことになる。

### マリアの特性

ところで、この「聖母の力によって、息子が再生される」という図式が、もしも「マリア・イエス」にも当てはめられていたならば、キリスト教は、本当に「マリア教」になっていたかもしれない。

十字架にかかって死んだイエスが、もしも「悲しむ母マリアの祈りによって」三日後の復活に導かれたとなれば——そのとき「死と再生」のドラマを主導したのは、間違いなくマリアということになるからだ。

しかし聖書は、そこまでの重要性を、マリアに与えることはしなかった。十字架にかかった息子を見たとき、このマリアは何をしていたか。聖書では詳細すら語られていないが、おそらくは、悲しみに打ち震えて、オロオロ泣いていただけなのである。

イエスを復活させたのは、あくまでも「父なる神」である。あるいは三位一体の理によりイエス自身であったかもしれない。これによって、キリスト教は、座標9を超えて、座標10の高みにまで登った。

それを証明するように、イエスはのちにアセンション（自己昇天）したが、マリアはアサンクション（被昇天）して貫うしかなかったのである。ここに歴然とした、二人の力関係の格差を見ることができよう。

### アナトの下降

しかし、アナトの場合は、やがて聖母の座すら失って「座標9」から滑落してしまう。というのも、ウガリット神話の別伝に「アナトが兄への慕情止みがたく、ついに兄に肉的な欲望を抱いてしまう」というエピソードが記されているからだ。

——バールの妹たちのなかで、もっとも美しいアナトは急いだ。バールは眼をあげてアナトをみる。バールも心は燃えた。バールは牡牛となってアナトの前にたち、アナトと交わった。

——再生のパールとの祝婚のなかで、アナトはパールの子を宿す。アナトに宿った生命は、大地の豊穡の確証であった。物語はここで完結している——

山形孝夫『聖書の起源』より

パールとアナトの接合による大地の豊穡——どうもここには、座標1の「性的オルギア」の気配があると云わざるを得ない。つまり「大地の豊穡を願って、無選択に当てがわれた男女が交歓する儀式」の気配があるのである。

もともと兄と妹は、本来は選択されてはならないセックス・パートナーである。

それが自然に受容され（＝無選択性）、なおかつ、それが大地の豊穡に結びつくとするれば、これはもう「性的オルギア」とのつながりを指摘せざるを得ない。そして事実アナトは、かかる「性的オルギア」のシンボルの存在となったのである。

かくして、アナトは聖母から、大地母神へと転落的に変容した。

「大地の生み出す収獲の恵みは、女性の胎内から生まれる自然の子の恵みを連想させる。ここから地母神信仰が生まれる（上山安敏『魔女とキリスト教』より）」

いや、マリアにしても、イエスとの母子相姦は可能性ゼロではない。たとえばギリシア悲劇の『オイディプス王』に、母イオカステによる、

「数多の男たちが、夢の中では母親と交わっているではありませんか」というセリフがあるぐらいだからだ。

しかし私たちは、マリア・イエス間で、そんなことが現実にあったとは、露ほども想像しない。そのような古伝承も見当たらない。ここにもマリアの聖性の「揺ぎなさ」が見て取れて興味深いものがある。

### （3）神秘主義者たちの言葉

#### 三人の神秘主義者

今度は男性側の視点に立って、いわゆる「神秘主義者」たちの言葉を紹介してみたい。これまでアルベドについての内容を書くことは何度かあったし、少しばかりならば、神秘主義者たちの言葉を紹介することもあった。

しかし、とくに有名な神秘主義者に関しては、不思議と名前だけが挙げてあって、彼らの言葉自体は紹介していない、という状態が続いている。これは、あまりよろしくないのではないだろうか。

いい機会なので、本節では、三人の神秘主義者の言葉を紹介してみたい。その三人とは、プロティノ

ス、エックハルト、シレジウスである。

簡単に紹介しておく、プロティノスは、三世紀の哲学者でエジプト出身である。新プラトン主義という神秘哲学を創始した彼は、八歳まで乳離れが出来なかったという。となれば、女性原理（アルペド）との相性はさぞかし良かったのだろう。

マイスター・エックハルトは十三、十四世紀にまたがる時代の神学者。若くしてドミニコ修道会に入った。実務的能力も高かった人であるが、その神秘主義な言説が、のちに「異端的である」として法王から弾劾されることになる。

なかでも、彼の死後に行われた焚書刑は、もはや後世の誰しも「エックハルトの伝記」を書くことが出来ないほどにも徹底された。

アンゲルス・シレジウスは十七世紀ドイツの宗教詩人。その名は、シレジア地方のエンジェル（天使）の意味である。もっとも、これは筆名で、本名はヨハネス・シェフラーといった。

私は何度か「神秘主義者は断片的にしか真理を語れない」と述べているが、シレジウスは、言わばその制約を逆手にとった。すなわち彼は、たった二行で終わる神秘詩を大量に生産したのである。これは神秘主義者にあつては、実に賢明な著述スタイルだと思う。

一通りの紹介が済んだところで、つぎに、各神秘主義者たちの言説を紹介していくことにしよう。

### プロティノスの言葉

・われわれの求めているものは一なるものであつて、われわれが考察しているのは、万物の始めをなすところの善であり、第一者なのであるから、万物の末梢に墮して、その根源にあるものから遠ざかるようなことがあつてはならない。

むしろ努めて第一者の方へと自己を向上復帰させ、末梢に過ぎない感覚物から遠ざかり、いっさいの劣悪から解放されていなければならない。なぜなら、懸命な努力の目標は善にあるからである。そして自己自身のうちにある始原にまで上りつめて、多から一となるようにしなければならない。

・かのものの会得は、学問的知識によるものでもなく、また他の知性体のごとく、知性の直知によるものでもない。それは知識以上の直接所有の仕方によるのである。

・この故に「語られもせず、記されもせず」というようなことが言われるのである。

・それを受け容れることが出来て、それに自己を適合させるだけの用意があり、一種の同化作用によってそれにいわば接したり、触れたりすることの出来る者のところではなければ、それは現在しないのである。

・自己のうちに万物を含み、すでに万物であるもの……

・いっさいの最初をなすもの（始原）は、いっさいのものに不足しないのである。

・かのものの直観のうちに自分自身を忘れるところまで行かなければならぬ。そしてかのものに合体して、いわばそれとの交わりの如きものを十分に尽くした後、帰ってきて、もし出来るなら、他の者にもかしこにおける合体交合の模様を伝えるようにしなければならない。——以上『善なるもの一なるもの』田中美智太郎訳より

## エックハルトの言葉

- ・全部的に神の御意志の中に没入し己れに我意のなくなったものこそ、完全にして真実なる意志ということができよう。
- ・まことに、罪を犯したということは、その罪によってわれわれが苦悩する限り、もはや罪ではない。
- ・真に神の意志の中へと移された人は、彼が以前に陥った罪については、それが起こらなかったらよかったとは思わないはずである。
- ・特に偉大な事業をなさしむべく選び給いし人間に対しては、もっともしばしばそうした運命をあたえ給うたのである。

・神的な悔恨が頭をもたげて神を仰ぎ見るや否や、一切の罪という罪は私が私の目を閉じ得るよりももっと早く、神の深淵の中に姿を消してしまい、悔恨が完全でさえあれば何らの罪もかつて起こらなかったかのごとく全然無に帰し終わるのである。

・お前はあるいは言うかも知れない、「おお主よ、私は全然裸であり、素寒貧であり、無力でありますので、どうしてあなたのお側に行くことができない気が致します！」と。

私はこれに対していう、お前がもしそういう気がするなら、お前はいいよお前の神のお側に行く必要がある、と。なぜなら、神の中においてお前は聖くせられ、そこにおいてのみ神に結ばれ、神と一体化せられるからである。

・われわれは神の中に移され全く彼と一体化せられ、彼のものはわれわれのもの、われわれのものは彼のものとなり——われわれの心臓と彼のそれとはただ一つの心臓となり、われわれの身体と彼の御身体とはただひとつの身体となるはずであるからである。

・第六段階において人間は、神の永遠性によって形像を脱却超越し、神の子となり終る。これ以上に高き段階はありえず、ここに永遠の休らいと淨福とが現前する。内的なる、新しき人間の行きつくところは永遠の生命であるが故に。——以上『神の慰めの書』相原信作訳より

## シレジウスの言葉

- ・水滴は海に入れば海となる。魂も神の中に取り上げられれば神となる。
- ・海の中では最も小さな水滴でさえすべてが海である。どの聖なる魂も神の中にあつて神になれないなどといえるのか。
- ・多くの穀粒が集まればパンであり、多くの水滴が集まれば海である。このように、われわれ多くの人間も神の中に入れば一つのものである。
- ・友よ、人が神を瞑想するならば、神なくしては永遠に見抜くことができないものを一度に直観する。
- ・永遠は時間よりも長いと思ひ込んでいる場合には、あなたは苦しみを語っていて、永遠の祝福について語っていない。
- ・あなた自身を小さくせよ。そうすればあなたは大きくなる。わがキリスト者よ、自分を取るに足りない

いものだと思えば思うほど、あなたは高められるのだ。

- ・今や神と一つになった魂は、その高さも深さも神と同じになるにちがいない。
- ・あなたがまことに光にあれば、罪人がこの世から消え失せるのを見るだろう。
- ・神の栄光のあまねきところでは、神は魂の真昼となるだろう。
- ・われわれが神になる以外には、何が神であるかを経験することは絶対にあり得ない。
- ・神は誰とでも親しくするわけではない。乙女と子供、この両者だけが神の遊び友達である。
- ・純潔な処女であることは大切なことだ。だが母にもならねばならない。
- ・あなたが心のすべてをあげて子供になれるなら、天国はすでにこの地上においてあなたのものである。
- ・神はただ存在しているのみである。——以上『シレジウス瞑想詩集』植田重雄、加藤智見訳より

## 付記

あまり引用文を多くしないように注意したが、そのぶん情報量として、食い足りないと感じる読者も出てくるかもしれない。

いつか、神秘主義（アルベド）の主題だけで、一つの書籍を作ってみたい気持ちを持っているので、読者には、そのときに今の憂さを晴らしていただくことにしよう。

また、三人の言葉を、第二福音書や第三福音書と照らし合わせてみると、神秘体験の内容が、より立体的に理解できるようになるかもしれない。

## 第7章

ディオニュソスとアリアドネ  
(座標0)

## （1）特徴のない虚無

### ルベドの前提としてのニグレド

座標9から座標0への下降——これは、光に満たされたアルベドの悟りから、闇の底に横たわるニグレドへと落下することを意味する。

第三福音書では、このことを「闇からの発光」たるルベドへ至るための伏線として描いた。

この意味では、それが漸次的な光の減少による「明るい状態から暗闇への変化」であった場合は、ルベドの伏線としては、ほとんど意味をなさない。

それでは、下降している間に、ルベドが発生するための「力学的エネルギー」が放散し、最終的にはエネルギーが「不足」してしまうからである。

ところがルベドとは、そうしたパターンとは「全く逆の形」で発生するものなのだ。すなわち、無限の光が「一気に、一斉に」闇の一点（虚無）に注ぎ込むことによって発生するのである。

究極の力動性が、闇の静寂を突き破って、虚無（闇）から無限の光を放出させることになるからである。

そして、そうであるならば、アルベディアン（正道）とニグレディアン（陽子）のヒエロスガモス（聖婚）となった、今回の「ルベドの成立」は、大変に力学的効率が良かったのだなど、改めて感慨を深くする。そのときの現状としてアルベドの権化だった者が、その現状を崩さないまま、虚無の権化と心理的に接合したのだからである。

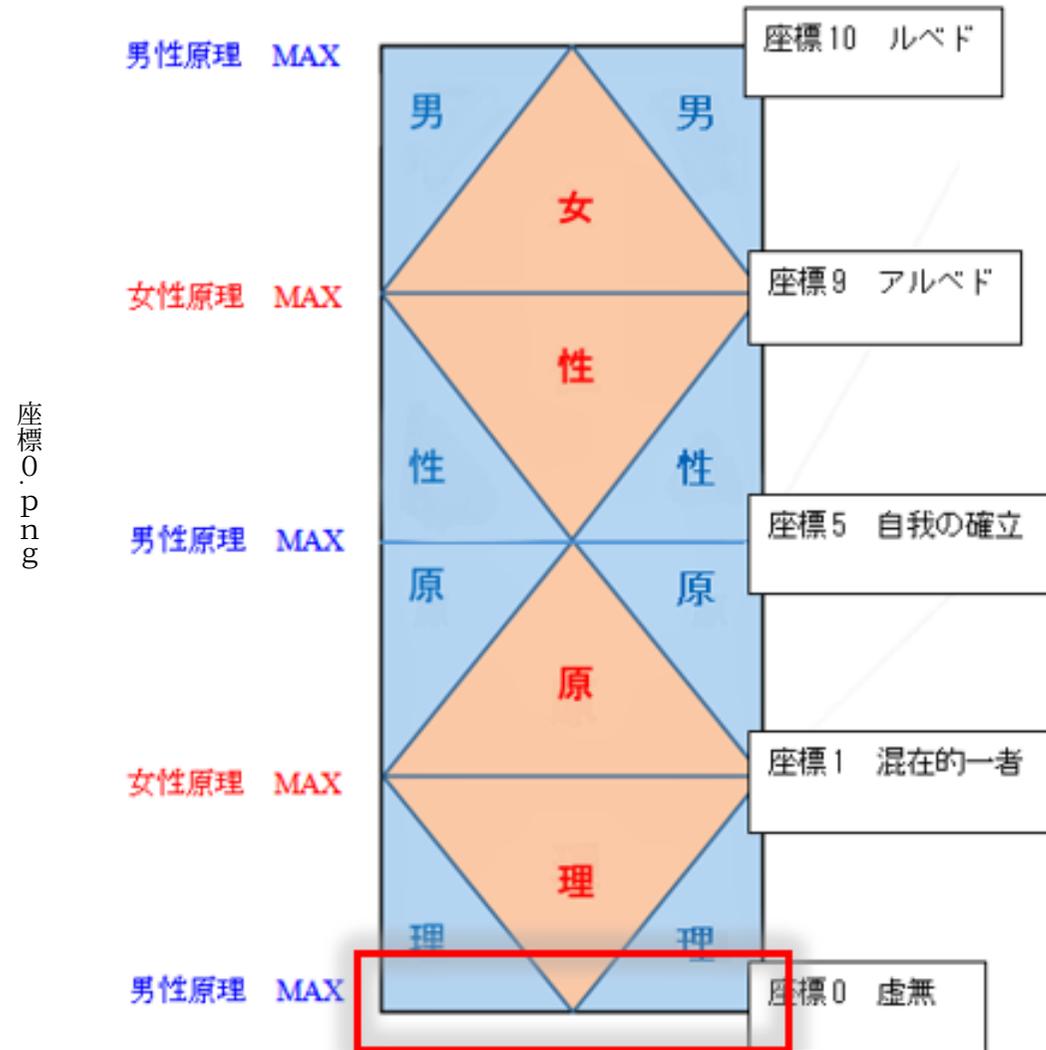
まことに聖霊は、まるで計算式を立てるように、私と陽子の運命を操ったのだろう。本当に憎たらしぐらいに老獪な計画性である。

それはともかく、本章では、そのような力動性は無視し、ただ純粋に座標0におけるヘルマプロディトス（両性具有）だけを眺めていきたいと思う。でないと話に收拾がつかなくなってしまう。

### 虚無の無特徴

そうしてみると、まず視野に入れるべきは男性側の事情である。原理図を見てもらえれば明らかなように、座標0は男性原理が強くあらわれる心境だからだ。

# 原理図



よって、男性原理下にある男性として、彼はヘルマプロディトス（両性具有）とは無縁であるように思われる。

ところが、ここには「座標0ならではの」特殊事情が存在している。そして、その特殊事情のゆえに「ここに見られるのは、男性的な男性なだから、それは単性偏向であって、両性具有ではありえない」とは一概に言い切れないのである。

そして、この「座標0ならではの」というのは、この座標が意味するところが「虚無」であることに起因するものである。

がんらい虚無とは、一切の特徴を失った、単なる「位置を示すもの」である。虚無 $\parallel$ 0次元 $\parallel$ 点とは、実際そのようなものなのである。

それに反して「性別」とは、それ自体、大いなる特徴と言える。男と女とは全く性質が違ってはいるからだ。そして、その特徴は、何か他のものとは異なる「あるもの」が「そこに存在している」ことを示している。

改めて言うが、これは虚無の「無特徴」という性質とは、明らかに相いれない。

つまりそこに、女性的ではない、男性的なものが「在る」というのでは、虚無の概念と、どうしても合致しないのである。

### マイナスの両性具有

もちろん、上位座標から、最下部にある「座標0」に向かっていく際には、虚無を目がけた集中性（男性原理）が生じるだろう。

しかし、それによって虚無へと到達してしまえば、そこでは性差などあり得るはずもないのである。

そのため、基本的には男性しか到達できない「座標0」にも、ある種のヘルマプロディトスが成立することになる。すなわち「男性的でも女性的でもない」という、マイナスの意味における両性具有である。

そのように、虚無自体には、どう考えても「性差」は存在しない。

ところが、そうであるがゆえに、この虚無を眺める者には、投影的に「虚無の性別を決めることができる」という形の選択肢が付与されるのである。

もっとも、これは極めて無意識的、無自覚的な選択である。そのようにする、というよりは、そのようにならざるを得なかった、という感じの「選択」である。

### 万能の投影の器

ここに虚無神、あるいは虚無のシンボルであるところの、ディオニュソスの性別があいまいである理由もあると思われる。

ディオニュソス神は、古くは「髭の生えた中年男性」の姿で通っていた。

ところが、次第に彼の姿は、それ以外の多くのヴァリエーションを持つことになる。たとえば女装させられた少年だったり、華奢でレスリングも出来ない体であったり、等々。

つまりこの男性神は、かなり女性要素が強いのだ。

しかも、この神が最も得意とする神術は「変身」ではなかったか。事実ディオニュソスは、牛や蛇、虎や竜など、じつに様々な形象へと、その体を変じてゆく。

これは明らかに、見る者の望むがままに、その性別を変えてゆく「虚無」の特徴と通じている。

要するに「虚無」とは、性差に限らず、どんな投影でも受け入れられる「万能の投影の器」なのである。これを逆から見ると、他者からのあらゆる要望を受容してしまったために、ついには自己喪失の状態である「虚無的人間」になってしまった、という表現になる。すなわち、さまざまに変身を遂げること、ついにウーティス（誰でもない）になってしまった者の悲劇である。

そこに彼はいるが、それは「誰でもない誰か」でしかない。これを思うと「ウーティスという言葉ほど、適正に『虚無的人間』を言い表した名称があるだろうか」と感嘆せざるを得なくなる。

## 投影について

ところで前項において、説明なしに「投影」という言葉を使用した。しかし一般の読者にとっては、この言葉は必ずしも馴染みぶかいものではあるまい。

そこで、ここに『ユング心理学辞典（山中康裕監修）』から、投影についての説明を抜き書きしておくと思う。ただし、それも項全体の抜き書きではなく、重要ポイントの抄出文である。

——「自身の」人格の受け入れがたい部分や困難な情動は、主体の外にある人やものに位置づけられる。

——人は他者（あるいは、外の組織やグループ）に、その人にふさわしいと感じられるようなならんらかの特質を感じ取り、そして、後になってしばしば、このことが実際とは異なることに気づく。

——「ユングの」分析心理学では、内的世界の内容を自我意識に利用可能なものにする手段としても投影を強調する。

——外的世界の人やものが投影を通じて活性化できる素材を提供し、内的世界に奉仕する。

——何か価値あるものを獲得するためには、投影を再統合すること、再收拾することが必要である。

以上『ユング心理学辞典』からの引用である。

## （2）避妊についての考察

### 傷を負った両性具有

座標0が「男性原理に占有された領域」であることは、前節でも述べてある。

そうだとすれば、この座標まで下降した女性がいるならば、彼女は疑いようもなくヘルマプロディトスの状態にあることになる。

しかし、他の座標とは異なり、このヘルマプロディトス化は、間違いなく女性に大きな傷を負わせることになる。女性という存在の大半は「自然」と強く結びついているが、座標0には、草の匂いも土の匂いもない、ただ純然な暗闇のみがあるからだ。要するに、そこに自然は存在しないのである。

自分の本性から離れたことをすれば、その主体は、どうしたって、苦しみと傷を負わない訳にはいかない。

この苦しみと傷については、第四、第五福音書を通して、かなり詳しく述べたつもりである。

そして、そこで中心的な題材となったのが、いわゆる「中絶手術」であった。中絶手術によって「胎児」と「女性としての自然性」との縁を切った女性は、それによって虚無の暗闇へと下降することになる。

しかし、彼女たちが心身に負った傷は、どうしても女性の「座標0への下降」に心理的な翳りを落とさずにはおかない。つまり本来なら無色で純粹な闇が、彼女らの苦痛や怨念のため、変に色づくのである。この後天的な翳りや色を、心理的な不純物と言っていいかもしれない。

### 避妊という手段

しかしながら、じつは右の中絶手術以外にも、女性たちを座標0に接近させる手段がある。

私は、この手段については初めて述べる。にも関わらず、今から私が語ろうとしていることは、現代にあっては、誰もが聞きなれているはずの話でもある。

すなわち私はいま、かの「避妊」について話そうと思っているのだ。

この避妊行為は、中絶手術と較べたら、はるかに穏当な印象を与えるだろう。事実、ここでは胎児を殺すような事態には至らないし、そのため誰かから後ろ指を指されるようなこともない。そのように言うことができる。

そして、ここで特に注目したいのが「ピルによる避妊」である。

もっとも、医学的な「ピル」は単に錠剤を意味するにすぎない。けれども今や、一般用語としての「ピル」は、避妊錠剤以外の何物でもなくなっていると言えよう。

産婦人科に行って処方してもらえば、女性はピルを自由に用いることができる。つまり事前にピルを

飲んでから、パートナーとのセックスに臨むことができるのである。

それに対して、スキン（コンドーム）や膈外射精による避妊は、どうしても男性側の協力を期待しなければならぬ。よって、より問題を女性側に引き寄せるならば、これらの避妊法に深入りしても仕方がないと思われるのである。

## ピル革命

ところでピルと言えば、一九六〇年代に声高に叫ばれた「ピル革命」を思い起こさずにはいられない。その革命の要旨は「女性はピルによって妊娠から逃れ、そのぶん社会的な自由を享受できるようになる」というものであった。

たしかに妊娠すれば外の仕事はしづらくなるし、出産の直前直後ともなれば、女性は自動的に、病院や家に閉じ込められてしまう。こうした事情が、ピルによって克服されるのならば、それは社会進出を望む女性たちにとって、まさしく「革命」であったことだろう。

となれば、これは言うまでもなく、フェミニズム運動の一環であった。そして、その影響は、現代まで色濃く波及していると言ってよいだろう。日本ではピルの普及率が低いままだが、欧米においては、ピルは女性にとって、かなり身近な存在として定着している。

こうした女性たちは、妊娠から逃れることによって、座標0への下降も、容易に可能となっている。まさに彼女らは両性具有（＝性喪失）的な存在なのである。彼女らは、妊娠も出産もしないことで、男性同様の「マイナスの意味におけるヘルマプロディトス」を体現している。

## （3）避妊がうむ国家衰退

### 人口減少の温床

繰り返すが、ここには中絶のような「直接目に飛び込んでくるような悲劇性」は見られない。たとえ聖ヒエロニムスが「子殺しと墮胎と避妊」を、すべて等しく殺人と規定したのだとしてもである。

ところが、ひとたび視野を大きく広げ、歴史的な鳥瞰を試みてみれば、ここには、もしかしたら「中絶よりも深刻かもしれない」悲劇性を看取することが出来る。

それは何か。それは漸次的な人口減少であり、悪くすれば「文化の喪失」にいたる道である。

なにしろ子供が出来ることを忌避してしまったのだ。それによって国の人口が減ることは、当たり前のようにも当たり前のことである。

たとえば、私には三人の子供がいるが、そんな私を世間の人々は「子だくさんのお父さん」と呼ぶことがある。

しかしながら、三人の子供というのは、一对の親が後世に残せる増加人数としては「最低限のライン」に過ぎない。つまり、三から二をひけば一になるということだ。この一が増加人数である。

これが二人の子供しか生まないならば、人口はそのまま横ばいにスライドするだけ（2→2→0）である。さらに今日よく見られる一人っ子の場合は、一人ぶん人口が減少していることになる（1→2→1）。

むろん、子供を生まない家庭であるならば、二人の減少となるだろう（0→2→1→2）。

こうした厳然たる現実があるのに、三人の子持ちを「子だくさん」と感じる人々が多数いるのだ。そうすると、その国では人口増加など望むべくもなくなってしまふ。

しかも人間は、ふとしたことで簡単に死んでしまう存在でもある。最低限に胡坐をかくことなく、ストックが出来るほど人口を増加させないでは、何かの拍子に、一気に人口は減少してしまふのである。

## 文化の喪失

そして、実際にピル等の避妊によって人口減少の道程に入っているのが、いわゆる先進国なのである。

たしかに女性たちは、ピルによって自然の摂理から逃れおおせたかもしれない。女性は、昔よりも文化的な生活を謳歌できるようになったかもしれない。さらには、それは彼女らにとって、座標5への上昇をスムーズ化する、大きな要因になるかもしれない。

しかし、その自然性の喪失は、文明を俯瞰して眺めれば、明らかに多大なるダメージを、人類史に与えることになるのである。

というのは、人口減少自体もダメージであるが、人口減少した高度文明には、必ずと言っていいほど「蛮族」が襲いかかるからである。

蛮族とは何かといえば、本質的に「自陣の人命を浪費することを何とも思わない人々」のことである。この野蛮性が、彼らをして蛮族と呼ばしめることになる。

彼らは概して人口数が多く、人権に関する倫理性も低いため「少しぐらい人口が減っても、民族としての欲求を叶えることを優先する」ということをモットーにしてしまふ。

彼らが求めるのは、主に衣食住の保証である。ただし、自分たち自身でそれを確立しようとはしない。そうする代わりに、それらを誰かから奪うことで、手っとり早く手に入れようとするのが彼らの特徴なのだ。

残虐でもある彼らは、軍隊アリの大群のように「進んだ文明」に襲いかかる。自陣に多くの犠牲を強いるながらも、とにかく数の論理で押し切ろうとする。そうして、ついにはその獲物を、丸ごと呑み込んでしまふのである。

もっとも、進んだ文明を呑み込むといっても、その文明的知的倫理的エッセンスをではなく、物質的なものを呑み込むだけの話ではあるのだが。

## 日本の危機

かつてこれをやられたのが西ローマであり、このときの「蛮族」とはゲルマン民族のことである。現代では、日本が蛮族である中国に呑み込まれつつある。

西ローマにも日本にも、間違いなく、世界に誇れるだけの文化があった。いや、日本には「現にある」。それが単なる数の論理によって失われてしまうのである。

そんなことはあってはならないが、現実にはローマは蛮族に呑み込まれた。よく言えば、そこからヨーロッパの歴史が始まった訳であるが、中国は逆に、日本を呑み込んだあと、おそらく一途な自壊の道を進むだろう。彼らが安穏と生活してられるのは、日本人を奴隷としていられる期間だけだと思う。

——ふと気づくと、あまりにも暗い未来予想図を描いてしまっているが、右で述べたことは、かなり「あり得る」話だと思う。

そして、こうした暗い未来のもとを質せば、そこには明白に人口減少の問題があるわけである。西ローマの場合は、内戦と税制システムの無理が祟って、民衆の人口増加が望めなくなった形だ。

しかし、日本や欧州先進国の場合は、文化レベルが上がったゆえの避妊問題が、その発端であったように思われる。しかも日本の場合、税制システムにおいても、ローマの末期と似たような問題が、大きのしかかっている。

そして、ふと気づけば、すでに日本は、労働人口の不足から、海外の移住者を受け容れざるを得ない状況になっている。もっとも、これは政府のアナウンスによれば、であるが。そして、この外国人たちが「蛮族の尖兵」でもあるところが、何よりも悲劇的なのだ。

結局私たちは、女性の「マイナスの意味におけるヘルマプロデイトス」を、基本線では、容認すべきではなかったのである。

むしろ私たちは、大地母神を讃えて、人口を増やすべきだった。この母神の「産めよ増えよ」というモットーは、最終的には、蛮族から国を救うものとなるからである。

かの大地母神ならざるヤハウエですら、ノアやアブラハムに対しては、この「産めよ増えよ」という言葉を与えているのである。この言葉の重要性は、いま改めて考え直すに充分値するものがある。

## 第8章

## シヴァ

## (1) ミトラスと暗闇と太陽

## ローマの密儀宗教

虚無を体现する人格として、まずは簡単にミトラスに触れておきたい。ミトラスはもともとイランの神であったが、紀元前後に、地中海世界へと流入していった。

帝政ローマでは、兵士たちの間でこの神を信仰することが流行し、地下空間で特殊な密儀が行われるようになる。その密儀に参加できるのは男だけで、地下に降りて行った男たちは、そこで儀式的に牛を殺したのだという。

——地上の神殿の代わりに、地下に密室を掘って男たちだけで寄り集まり、短剣で牛を屠って再生を経験するという風変わりな儀式である。

青木健『古代オリエントの宗教』より

その儀式が、実際のところ何を意味するのかは判然としない。

だが、地下に降りてそれが行われたこと。男たちだけに参列の資格があったこと。そして牛を殺すこと——この三つのポイントに、私はどうしても「ディオニュソスのもの」を感じてしまうのである。

それは何故かといえば、まずディオニュソスは、地下の暗闇に潜む「虚無」を表す神である。

第二に、性的オルギアで子供を孕んでしまう女たちは、ディオニュソスの祭の奥義に参列することが出来ない。

第三に、ザグレウスがダイターンたちに八つ裂きにされたとき、彼は牡牛に変身してはいなかっただろうか。

## 冬至の死と再生

しかも、このミトラスは、冬至に死に、そこから次第に蘇る「不敗の太陽神」であった。

この場合の死とは、日照時間の最小化（＝冬至）のことを指す。そして、ここでいう蘇りとは、日照時間の漸次的な長期化のことである。言うまでもないが、冬至を過ぎれば、太陽の日照時間は、次第に長くなっていく。

これは要するに、太陽の「死と再生」であり、そのまま自然と「ルベド＝無からの創造」に結びつく。そしてディオニュソスとゼウスが結合したときも、それは「虚無からの存在の創造」となったのだっ

た。これと同じことをミトラスは、不敗の太陽神として、季節的に体現しているわけである。

しかも、ミトラス教によって著しく宗教味を帯びた冬至の日は「蘇りの神イエス」の降誕にふさわしい日として、キリスト教のドグマに換骨奪胎されることになる。当時のユリウス暦における冬至は十二月二五日。すなわち私たちが良く知るクリスマスの日である。

## (2) ヒンズーの神の三位一体

### インドのディオニュソス

『ディオニュソス・二人の母』の第一章でのことだ。私は、インドまで旅をしたディオニュソスに、次のような台詞を語らせたことがある。

「私は」インドまで行ったのだよ。そこでヒンズーの神々に出会った。とくにシヴァという神には、私とそっくりな役割を見た」

ここでは、このシヴァについて触れてみたいと思う。



శ్రీ వేంకటేశ్వరస్వామి

してみると、シヴァの職掌は「破壊と創造」である。むしろこれを「創造のための破壊」と言ったほうが分かりやすいだろうか。

ディオニュソスが「私とそっくりな役割」と言ったのは、まさにこの点についてのことである。なぜか。それはディオニュソス自身もまた、存在を破壊してはそれを虚無に至らせ、その虚無の一点から「無からの創造」という神的営為を導く神であるからだ。

### 三つ巴の神々

そして、ディオニュソスとの共通点は、シヴァを中心とする「三神一体」の構造にも色濃く見られる。ここでいう三神とは、ヴィシュヌ、シヴァ、ブラフマーのことで、いずれもヒンズー教における特に重要な神である。

してみると、ヒンズー教では、まずヴィシュヌが「存在の維持」を司る。そして、その存在をシヴァが「破壊によって」虚無へと落とし込む。そして、ここからブラフマーが「虚無からの存在の創造」によって、ヴィシュヌへと「存在」をつなぐのである。

ところで一般的な解説では、ヴィシュヌを維持、シヴァを破壊、ブラフマーを創造、という風にしか言い表さない。けれども右のように、そこに「存在」という言葉を付加すると、ずいぶんと「神々の三つ巴」の事情が明瞭になるのではないだろうか。

そして、ディオニュソスの場合は、ヴィシュヌの役割をアポロンが果たし、ブラフマーの役割をゼウスが果たすことになる。

そこでは、まずアポロンが「存在の維持」を司る。そして、その存在をディオニュソスが「破壊によって」虚無に落とし込み、そこからゼウスが「虚無からの存在の創造」を行うのである。

端的に言えば、アポロンは存在の神、ディオニュソスは虚無神、ゼウスは創造神だということだ。こうなれば、ディオニュソスがシヴァのことを、

「自分とそっくりな役割を担っている神」と評したとしても、そこに間違いは全くないと言っていいだろう。

### パールヴァティー

ところで、シヴァの妻もまた、アリアドネと同じぐらいに興味深い。

ヒマラヤ山脈の娘とされる女神パールヴァティー。彼女は、いたずら心を起こして、夫の両目を手で隠したことがある。すると世界の一切が闇に包まれたというのだが、これは神話的なニグレド（虚無）の表現とみて間違いないだろう。

そしてパールヴァティーは——身体的に接触しているのであるから当然——夫とともにその場面（座標）にいる。むしろ、積極的にその暗闇に関わっているのである。

彼女は人間ではないので、アリアドネの墮胎のような犠牲を払うこともなく、ごく自然にシヴァの本質（座標0）と重なりあっているようだ。もっとも彼女は、自然出産することなく、我が子を得ているので、そのあたりに墮胎とパラレルな「女性としての特殊性」を感じるのではあるが。

ともあれ、彼女が両手を離れたとき、シヴァの目からは、世界の一切を浮かび上がらせる創造の光が放たれたのであろう。それはまさに、神話化された「虚無からの存在の創造」といえる。

### （3）活躍しない主人公

#### 受け身のディオニュソス

ミトラス、シヴァと見てきたが、最後にもう一度ディオニュソスを見ておきたい。

私は二〇二四年に『戯曲ディオニュソス』として「闇の神性」「二人の母」「世界の墓」という三部作を配信した。

つまり作者として、丸一年をディオニュソス神とともに過ごした訳だ。そして、その共生のなかで心から思ったのが「ディオニュソスほど活躍しない主人公も珍しいな」ということだった。

ゲーテが語るところによれば、小説の主人公はくどくど考えて前に進まないような性格がよくて、戯曲の主人公は「突っ走るほど」積極的なタイプがいいそうだ。たしかエッカーマンの『ゲーテとの対話』にそのようなことが書いてあった。

そのような考えからすれば、ディオニュソスは、明らかに戯曲の主人公としては相応しくない性質を持っている。彼は何をやるにつけても消極的だからである。

事実ディオニュソスが「誰かに何かをされている場面」は、いくらでも見つけることが出来るが、逆に「誰かに何かをする」場面は非常に少ない。

そのため、パプーにおける作品紹介文のなかで、思わず私は「主人公は相変わらず活躍しませんか」と呟いてしまったぐらいなのだ。

しかし実際には、私が『ディオニュソス』を創作する前から、彼についての神話伝承が、すでにそのような消極的性質を持っていたのである。

#### ディオニュソスを中心にした渦

思うにこれは、ディオニュソスの本質である「虚無」の性質ではあるまいか。

虚無は、それ自体は何でもない。ただの点でしかない。しかし、その何でもない点に向かって、周囲の

存在のほうが、渦を巻くようにして呑み込まれていく。

その呑み込まれた先の別天地では、私たちの目には隠された「無からの創造」が営まれていると思うのだが——此岸に住む私たちには、さしあたって、虚無に呑み込まれていく、存在の渦しか見えない。

それで『戯曲ディオニュソス』の登場人物たちは、まるで引き寄せられるようにして、ディオニュソスに関わることになる。

そして、ディオニュソスを核としながら、それぞれの登場人物が、彼ら自身の役割を果たしていく。憎んだり恨んだり、ときには愛したり、というような人間関係の渦をつくる。

このような図式が、ディオニュソス神話の基本的構造なのである。

とくにそれを感じたのが、ティーシポネの策略によって、オルコメノスの王家が壊滅してしまう場面だ。あときディオニュソスは、本当に何一つ積極的な行動をしていない。実際のところ、彼はただ意識を失ってノビていただけなのである。

キュベレーの神殿でも、ディオニュソスは、シレノスやモルティに担がれたり、キュベレーの女陰に呑み込まれたり、といった情けない姿しか見せていない。本当に笑ってしまうほど「受け身」が徹底している主人公なのである。

例外的なのは『二人の母』における、ペンテウスに対する懲罰と、冥界でのケルベロス退治ぐらいだろうか。とはいえ私は、これらの場面に、正直「ディオニュソスらしくない感じ」を覚えてしまうのであるが。

いずれにしても、こうした受け身性と「マイナスの意味におけるヘルマプロディトス」の根っこが一緒であるのは間違いない。端的に言ってそれは、紛うことなき「虚無のなせる業」なのである。

第9章 アダムと肋骨（座標10）

## （1）存在と現象

### 多田富雄氏の言葉

私は二十三歳のときにルベドの悟りを得た。そして、その悟りの内容を心のなかで整理していく上で、実に大きな恩恵を与えてくれたのが、免疫学者である多田富雄氏の言葉だった。氏は言う。

「私は女性というのは存在だと思えますけども、どうも男というのは現象に過ぎないんじゃないかところごろ思いましたきたんです」

これはユング派の心理学者、河合隼雄氏との対談のなかで発せられた言葉だ。もう少し詳しく言うと、多田氏の『免疫の意味論』という本をめぐる対談のなかで発せられた言葉である。

見てのとおり短い言葉であるが、この言葉は私にとって『免疫の意味論』一冊分まることよりも、重大な意味を持っていた。

というのも——まことに意外なことであるが——『免疫の意味論』のなかには、右の言葉の同文や、全く同じでなくとも、それと似たような言葉すら、見つけることが出来なかったからである。

### 存在と現象

それはさておき、まずは「存在」と「現象」という言葉の定義から始めよう。ここを揺るがせにしてみようと、問題の本質が霧のむこうに逃げていってしまう。

そうしてみると、存在とは「人間や事物が実際にあること」を指す。それに対して現象とは「現れた形、事柄、できごと。本質と対比して、表面だけの現れ」ということになる。

つまり、存在を本質的な状態であるとすれば、現象は、その存在による「仮にして表面的な現れ」ということになる訳だ。そして、こうした定義のうえに多田氏の、

「私は女性というのは存在だと思えますけども、どうも男というのは現象に過ぎないんじゃないかところごろ思いましたきたんです」

という慨嘆があったわけである。

では多田氏は、どうして、このような考えを抱くようになったのか。それは「座標1」でも引用した、次のような男女の事情があるからである。

—— 遺伝的に男と女が決まっているといいますが、そんなことはないんです。それじゃあどうして決まるかといいますと、どうも、もともと人間は女であって、なんとかして男という役割分担を作るという目的だけでY染色体というのが働くんです。

——ほっとけばみんな女性になっちゃうんですけど、Y染色体のほうから、女性ホルモンを男性ホルモンに変えるような指令が出るんです。そうしますと、男性ができるんですね。私たちはそういう存在なんです。無理矢理男性にさせられていますから、いろんな病気、男にだけ起こる病気、たとえば色盲とか血友病とかたくさんありますからね——

河合隼雄対話集『こころの声を聴く』免疫学者、多田富雄との対話より

### 存在と現象の逆転

右のように言われれば、私たちも、たしかに女性は存在だが、男性は現象に過ぎないような気持ちができる。

そして、その納得は「存在のほうに高い価値があり、現象のほうには、存在よりも低い価値しか与えられない」という価値判断につながっていく。

もとより「本質的で恒常的なものよりも、一時的で特殊なものの方が高価値である」という理屈は通らない。重要だから本質的と呼ばれるのであろうし、本質的であるから恒常化するのだらうからだ。ところが、アルベドとルベドという悟りの更新にあたっては、そのような価値判断が、大なる逆転現象を起こすことになる。

すなわちそれは、女性原理の表れであるアルベドを、男性原理のルベドが、その重要性において、軽々と超越してしまうことである。

これについて、出来るだけ丁寧に説明することにしよう。

まずルベドという悟りの中心には「無からの創造＝虚無からの存在の創造」というヴィジョンがある。そしてそこには「虚無」という、存在をなし崩しにして、それを「恒常ならざるもの」としてしまう因子が見いだされる。

存在をなし崩しにして——そのように崩壊させられることによって、存在は恒常のものから「一時的なもの」へと降格させられてしまう。その意味で「虚無からの存在の創造」は、たしかに「現象」という言葉の範疇へと入ってくるのである。

### 存在の根拠としての現象

しかしながら、この「無からの創造」という「現象」は、ルベドの高みにあっては、一転して「存在そのものの発生根拠」として機能することになる。

そもそも「存在そのもの」は、一体どこから来たのか。アルベディアンの認識では、それに対する答えとして「それは唐突にそこに在ったのだ」という言葉しか口にすることが出来ない。つまり率直に言って、アルベディアンは存在の根拠を全く知らないのである。

しかし、ルベディアンへの認識段階においては「無から創造されることによって、存在は現れたのだ」という風に確言することが出来る。これはそのまま「現象が存在の根拠になっている」ということでもある。より明確に言えば「創造とは現象であり、この現象は、存在に先立つ」のである。とすれば、ここでは明らかに、当初語っていた「存在と現象の価値判断」が、逆転現象を起こしていることになる。

## （2）現実と理想

### 逆転現象の影響

この逆転現象は、さしあたり形而上にある絶対的な世界（アルペドやルペド）での出来事である。とはいえ私には、それが形而上世界に留まらず、形而下の世界にも、大きな影響を与えているように見える。それはこういうことだ。

一般家庭でもよく見られることだが、男性はときに、自分の理想を女性（妻や母や娘）に語って聞かせることがある。

そんなとき、女性の「盤石の現実感覚」は、その理想を、にべもなく却下してしまう。なぜならそれは、彼女たちにとっては「子供じみた夢物語」にしか感じられないからである。だから彼女たちは「そんなこと出来るわけないでしょ」と言って取り合わない。

ところが、それと同時に「歴史的には」剛腕の政治家や軍事家たちが、女性の現実性に抗い、あるいは物ともせず、世界のあり方を「自分自身の理想」へと近づけていった事例が確かにある。アレキサンダー然り、カエサル然り、ナポレオン然りである。

このとき、せっかく秀逸なりアリズムを持っているのに、実際には、男性側の理想主義の巻き添えをくった女性たちがいた訳である。

男性によって更新された現実には、煮え湯を飲まざるを得なかった女性たち——彼女たちにとっては、何としても悔しい歴史の流れがあった。そういうことになる。

だが、そうであるならばだ。そうであるなら、女性たちは、わざわざ子宮内で性転換させてまで、この世に「男性という現象」など生み出さなければよかったではないか。

だって男性さえいなければ、女性は、自分たちが望む「現実」を、いつまでも享受できたはずなのだから。変化に乏しいまでも、間違いなく穏当である「現実」を。

### 現象（男性）の意義

しかしながら私は、根源的には、ここに「積極的で肯定的な意義」があるのだと考えている。女性がわざわざ「男性という現象」を生み出すことについて、そこには間違いなく肯定的な意義があると考えているのだ。

それは何故かという点、まず、かの「存在の原理」の影響によって、女性はどうしても形而下（存在）の倫理に閉じ込められてしまうからである。女性一般の傾向として、私には確かに、そのような制限性があるように見える。それが彼女らの現実主義でもある。

そして、こうした女性たちが、自分たちの倫理性に「形而上的な視点」をもたらしたいと願ったとしても、仮に言葉にすれば、

「存在（女性）が存在のままでは、安定はしていても発展することはない。けれども存在（女性）が現象（男性）に導かれたとしたらどうか。そこにはむしろ、著しい不安定さが生じるだろう。だが、そのような不安定さの中には『発展に結びつく機縁』もまた、何度も生じることになるのだ」と言っている。

その願いを叶えるためにこそ、彼女らはあえて——創造の原理を秘めた——「現象」である男性たちを製造したのではないか。少なくとも、そのように考えれば、現実との辻褄は合うのである。

## アダムの肋骨

かくして、現象にすぎない男性（男性原理）が、アルベド以上の真理である「ルベドの悟り」を担うことが正当なことになる。

そこには限りなく高められた「現象の真理」があるのである。

そして「虚無からの存在の創造」という構文からも分かるとおり、そこには「存在」が不可欠の重要性で組み込まれている。

そして、この「存在」は、他ならぬ「存在そのもの」のことであり、これは言うまでもなく、女性原理の現れであるアルベドの、またの名前でもあるのだ。

ということ、ルベドは、基本的には男性原理的なものであっても、そこに豊富な女性原理を含有していることが想像できる。換言すれば、そこにヘルマプロディトスの相が、現れていると言うことが出来るのである。

この事実を、神話的に示しているのが『創世記』に登場するアダムである。

彼はのちにエヴァという配偶者を得ることになるが、そのエヴァは、アダムと同時に聖書ストーリーに登場するわけではない。彼女はアダムから分岐した存在であり、そうして分岐する以前には、アダムの肉体の一部だったのである。

それではエヴァは、どのような形式で「アダムの一部」であったのか。

言わずとも知れている。アダムの肋骨としてである。エヴァは、アダムの骨として、彼の肉体に内在していたのである。

そして、この時点においては、エヴァは自分自身の意識を持っていなかった。すなわち、人間としての意識の主導権は、断然にアダムのほうが担っていたのである。

その点において、原人アダムは、男性意識優勢の意識ではあった。しかし、そのうちに肋骨的な女性原理を含んでいるのも事実であり、ここに我々は、男性優位のヘルマプロディトス（両性具有）の現前を知ることになるのである。

### アダムとエヴァのその後

ところがエヴァは、アダムと分岐したとたんに、夫婦間のイニシアティブを取るようになる。何といても、善悪を知る木の実を採ったのがエヴァなら、それを食べるようアダムに強制したのもエヴァなのであるから。

『創世記』の一読者としての私は、このくだりに登場するアダムを、正直「なんだか情けないな」と軽蔑していたものだった。

それはともかく、象徴的に言えば、この変化は「ルベドからアルベドへの下降」「男性原理主導から女性原理優位への推移」を表している。

そして「善悪を知る木の実」を食べたところからは、アダムとエヴァは、二元性の世界（善悪二元）へと、さらなる下降を強いられることになる。つまり座標9から座標8以下の世界へと下降するわけだ。これが聖書の民から「樂園追放」と呼ばれている場面である。

ここまで来ると、私など「ヘルマプロディトスとしてのアダムからは、ずいぶんと離れてしまったものだ」と嘆息を禁じ得ないのである。

## （3）女性とルベド

### 答えを出せない問題

女性が、ルベドの真理を掴めるものなのか。それについては、私は率直に言って「分からない」としか答えられない。

女性たちは、墮胎や避妊によって「一時的にはあっても」虚無に到達することが出来る。であるからには、もしかしたら彼女らは「虚無からの存在の創造」にも到達できるのかもしれない。

しかし、そうした女性がいるとして、はたして彼女は、自分のなかに既存している自然性（＝混在的一者やアルベドの真理）を、心から肯定的に捉えられるのだろうか。そうした疑問が、私の脳裏をかすめる。

というのも、そうした自然性を否定したからこそ、墮胎や避妊という疵（きず）を引き受けられたの

が彼女であったからだ。ここで言う彼女とは、虚無に到達した女性のことである。

つまり彼女には、ヘルメスの杖という自己本性に対する、深刻な欠損箇所があるのだ。

そうなる、神の肢体の全体像を受容するルベドの悟りは、十全なものとしては、決して彼女のものにならないのではないだろうか。そのような予感が、私にはしてくるのである。

### 肋骨としての矜持

そうであれば、ルベドの座標における、正しい女性原理の居どころは、やはり前節で語ったような「アダムの肋骨」なのではないだろうか。

それが眼でも脳でもないことを、気に召されない女性もあるかもしれない。

しかし骨や内臓諸器官であっても、それが失われたならば、人間の肉体は、その頭脳を含めて、存立不可能になるのである。その意味において、肋骨たる女性原理には、紛れもなく大きな存在意義があると言えるだろう。

とはいえ、骨や内臓には、それ自体で、人間の意識を統括できるだけのポテンシャルは確かにない。それと同じように、アダムの肋骨たる女性原理もまた、座標10においては、アダム（男性原理）ほどの明晰なグノーシスは得られないに違いない。

そうすると、この座標における女性は、やはり「男性原理の内臓器官としてのヘルマプロディトス」なのだろう。それは、一個の人体としてのヘルマプロディトスとは、少なからず違っているとわざわざ言わざるを得ないのである。

## 第10章

### エメラルド板

## (1) ヘルメス・トリスメギス

## ルベディアンを求めて

シリーズ第一書の『ネチエリケト』もそうだったが、本書は「主文」と「補論」を、サンドイッチ状にする形式で書かれている。奇数番の章が主文で、偶数番の章が補論である。そして補論では、それぞれの座標に見合ったサンプルを紹介してきた。

これが座標9、すなわちアルベドまでは良かった。アルベディアンは、世に数多といるからである。つまり紹介するサンプルに事欠かないということだ。

ところが、座標10に属するルベディアンとなると、その人数が一気に減ってしまう。まさに激減であり、良質なサンプルも発見が難しくなってしまう。

かのイエスですら、ルベディアンとしての確立度となると、少し心もとない感じがするぐらいなのだ。それぐらい、真正のルベディアンとは稀有な存在なのである。

正直なところ、私が思いつく、歴史上の確実的ルベディアンといえば、インドのゴータマ・ブツダぐらいだ。

そう、ゴータマ・ブツダこそは、真正のルベディアンである。彼が得意とした対機説法など、まさにルベドの悟りの賜物であろう。とはいえ、私なぞが仏陀について言及するのも、若干おこがましい気がするのである。

そこで浮かび上がってきたのが、ヘルメス・トリスメギストスである。錬金術の主催神であり、私の『戯曲ディオニュッス』では、物語の影の主役ともなっている。

もっとも、この人物については、あくまでも伝説上の存在であって、実在の人物ではないという見方もある。

しかし、彼が書き残したと言われている「エメラルド板」は、現代においても確かに現存している。しかもそれは、ルベド的な叡智に満たされている。

よってルベディアンとしてのヘルメス・トリスメギストス、乃至、彼に相当する人物は、やはりこの地上に実在したと考えるよかるう。

だいたい振り返ってみれば、本書では、聖書の登場人物であるアベルやカイン、ユダヤ教の伝説に登場する、リリトなども紹介してきたのだ。いまさら人物サンプルの実在性など、問題にするほうがおかしいだろう。

## ヘルメス・トリスメギストス

一応、ヘルメス・トリスメギストスの人物像に迫ってみよう。

この人物の出自については、さまざまな説（伝説）があるのだが、ここではアレクサンダー・ロー『錬金術と神秘主義』の記述に基づいて紹介してみたい。

そうしてみると、ギリシア神話における神ヘルメスと、古代エジプトのトト神を初めに同一視したのは、後期古典期のギリシア人たちということになる。彼らは当時エジプトに移民していたギリシア人である。

トトは文書と魔術の神であり、ヘルメスと同様にプシユコポンポス（靈魂を冥界に案内する者）として崇拝されていた。この同一性が、トトとヘルメスを合体させ、ここにヘルメス・トリスメギストスという神的存在を創り上げたのである。

このヘルメス・トリスメギストスという神は、エジプトの人々に、象形文字を含めた、自然と超自然の知識を授けたとされている。

ዘመናዊ ጥንታዊ



加えて、エジプトの伝説では、これと同様の事をしたとされるファラオ（王）が存在したとされている。そのため後世の錬金術師たちは、このファラオこそ、自分たちのヘルメス・トリスメギストスだったのではないかと考えた。

そうした錬金術師たちにとっては、かかる王こそは、自分たちの錬金技術に関する、神聖な戒律を与えたもうたモーセであった。すなわち彼らは、モーセの十戒と、エメラルド板の十三項をパラレルに見たわけである。

もっとも、このエメラルド板は、現在では、西暦六世紀から八世紀ごろに書かれたものだと考えられている。それが十二世紀ごろに西洋に流入、翻訳された。そして、十四世紀ごろには、キリスト教社会においても、人々に知られる書物となっていたのだった。

## （2）エメラルド板の全貌

### 十三項目の言葉

ヘルメス・トリスメギストスについての紹介が済んだところで、では今度は「エメラルド板」を見よう。

前節で触れたように「エメラルド板」は十三項目の短文で構成されている。モーセの十戒よりはボリュームがあるが、決して長いものではない。そこで、ここでは三項目の全てを挙げていきたいと思う。テキストは、澤井繁男氏の著作である『錬金術』から引用させていただいた。では御覧いただこう。

- 一——こは真実にして偽りなく、確実にしてきわめて神聖なり。
- 二——唯一者の奇蹟の成就に当たりては、下なるものは上なるものの如く、上なるものは下なるもの如し。
- 三——万物が一者より来り存するが如く、万物はこの唯一者より変容によりて生ぜしなり。
- 四——太陽はその父にして、月はその母、風はそを己が体内に宿し、大地は乳母なり。
- 五——そは万物における完全なる父なり。

六——その力は大地の上に限りなし。

七——汝は、火と大地を、精と粗を、静かに巧みに分離すべし。

八——そは大地より天に昇り、たちまち降りて、優と劣の力を取り集む。かくて汝は全世界の栄光を己がものとして、闇はすべて汝より離れ去らん。

九——そは万物のうちの最強者なり。すべての精に勝ち、全物体に浸透するが故に。

十——かく、世界は創造せられたり。

十一——かくの如きが、示されし驚異の変容の源なり。

十二——かくて我は世界靈魂（叡智）の三部分を備うるがゆえに、ヘルメス・トリスメギストスと呼ばれたり。

十三——太陽の働きにかけて、我は述べしことに欠く所なし。

### （3）エメラルド板の解釈

それでは次に「エメラルド板」を、私がルベディアンとして再構成してみよう。福音書シリーズや本書の読者であれば、その内容を「ある程度まで」掴めるだけの文章を、ここに掲げたいと思うのである。ではご覧いただこう。

#### 座標1から座標8まで

大地はあなたの乳母である。母なる大地が草木を生むように、あなたも母親から生まれてくる。これが最初の段階である。

大地に育まれて大きくなったあなたは、自身の自我（火）を、共同体（大地）から分離しなさい。ただしこれは、分割作業ではなく、あくまでも「抽出的な作業」であることを肝に銘じなさい。

あなたはそのとき、努めて「精髓（自我）」を、粗雑なものから、静かに巧みに抽出分離させるべき

である。抽出ならざる「分割による分離」に勤しめば、それはあなたに、視野狭窄と、残酷な戦闘性を押し付けることになるだろう。

そしてここでは、抽出による自我の分離が実際に為されたとしよう。

しかし、分離が上手くいったとしても、その状態に甘んじてはならない。分化した者は、今度は総合的な一者となることを目指すべきだからだ。それは、実現すれば奇蹟のように珍重されることであるが、だからといって決して「絶対に不可能なこと」ではない。

## 座標9

そして、その「一者の奇蹟」の成就にあたっては、次のような理が大きな助力となる。すなわち「下なるものは上なるものの如く、上なるものは下なるものの如し」という。要するに、上下にあるものは、互いによく似ているということである。

その理により、かつて大地と母が受け持っていた混在的な一者性は、いまや——上下反転するような形でもって——総合的な一者性として再現されることになる。

この総合的な一者性において、母なる子宮がその内に宿すのは風（霊）である。ここでの母は、肉体的な母ではなく、霊的な母なのである。

こうして、かつて下なるものとして「大地」が母の象徴となったように、今は上なるものとして「月」が母の象徴となるだろう。月・母・一者性——ここにアルベドの精髓がある。

そして、万物は一者より出来たのだから、万物はこの一者の変容によって生じたとも言えるだろう。このことを知ることは、大いなる真理の会得に他ならない。

しかしながら、これで錬金作業は終わり、ということではない。

たしかにあなたは大地から発出して天まで昇った。けれどもこの後は、再び下方に降りてゆかねばならない。それによって天的で優れた力も、地下的（＝ニグレド）で劣った力も、両方とも自分のうちに取り込まなければならないのである。

## つづき（座標10）

これを見事に成就したならば、その時こそあなたは、全世界の栄光をすべて己がものとしているだろう。それと同時に、無知の闇は、すべてあなたから離れ去っているだろう。そして、あなたは、そのときこう言うだろう。「こうして世界は創造されたのだ」と。

そう、ここで開示される真理は、創造主の真理なのである。「無からの創造」なのである。これがルベドと呼ばれる悟りである。そして創造神の真理であるがゆえに、このルベドは、精神世界の最強者である。すべての精神に勝り、その段階論によって全存在に浸透するがゆえに。

そして、アルベドが月の真理であるとすれば、ルベドは太陽の真理であり、アルベドが母なるもので

あるとすれば、ルベドは父なるものである。しかも、それは全存在を統べる、完全なる父性である。この父の力は、全存在に向けられて遍く行きわたる。

以上述べてきた、アルベド、ニグレド、ルベドの三段階が、人類に示された驚異の変容の源泉である。そして私は、この三つ段階をすべて悟得した者である。

かくて私は、世界霊魂の三部分を備えているがゆえに「三倍も偉大なるヘルメスⅡヘルメス・トリスメギストス」と呼ばれるのである。

ルベドという、暁の太陽の宗教性を語り尽くした今、私に言葉足らずな盲点はないと言えるだろう。これまで語って来たことは、真実にして偽りなく、確実にしてきわめて神聖なものである――

――なるべく長く長くないよう努力したが、結果はいかがであろう。おそらく、ヘルメス・トリスメギストスⅡルベディアンという図式には、読者にも、納得していただけたとは思うのだが。

ヘルメティック・トリニティを結ぶにあたって

## 三部作の完結

本書の上梓によって『ネチェリケト』『色彩の寓意』『ヘルマプロディトス』で構成された三部作「ヘルメティック・トリニティ」も、ついにその完成を迎えることになった。

いずれの作品も、私でなければ発想できない内容を持しており、それを一定の形として残せたことは、じつに感慨深いものがある。

ことに『色彩の寓意』『ヘルマプロディトス』とは付き合いが長い。この二作品については、その着想を持ったのが『アルベド・自己形成の過程』の制作期と同じ頃だったのである。この作品は、私が二〇代のときに執筆した哲学書であるが、そこに次のような一節がある。

——アルベド・シリーズは、今のところの予定では『自己形成の過程』『アルベド侵入』『色彩の寓意』『存在の原理』『女性の本質（仮）』の全五巻によって構成するつもりでいる——

そのうちの「色彩の寓意」と「女性の本質」が、本シリーズの『色彩の寓意』『ヘルマプロディトス』として生まれ変わっている。

ずいぶん発想を寝かせたものだが、それでも、これに最終的な形状を与えられたことには、著者として、大きな喜びを感じている。

なお『ネチェリケト』の発想を得たのは、ここ十年ほどの話で、右の二作品と較ぶべくもない若輩さである。こちらは、純粹に真新しい気持ちで創作に取り組むことが出来た。

それにしても、はじめは「小さく短い作品をつくろう」と思って始まったシリーズが、結果的には、かなり内容も重く、ページ数も多い本として結実したのには、我ながら苦笑を禁じ得ない。

そのうち、ページ数が著しく増したことに關しては、そうなった原因は明らかだ。今回の取り組み以前に、すでに草稿が完成していた『色彩の寓意』のせいである。これを推敲して本稿を制作したところ、当初の予定よりも、ずっと厚いものとなってしまった。

そのため、この『色彩の寓意』とのバランスを取るために『ネチェリケト』と『ヘルマプロディトス』についても、意図的に原稿の分量を増やしたのである。その増量した部分が、各書の「補論」の部分に他ならない。

とはいえ、この補論の執筆は、私自身にとっては、とても楽しいものとなった。ほとんどノープランでパソコンに向かい「はて今回は、どういうインスピレーションが降りてくるかな」と待っている時間が楽しかったからである。

実際、インスピレーションは流れるように降りてきた。

あるいは「そのとき」には何も思い浮かばなかった場合でも、ジョギングをすると、走っている間に、

インスピレーションが降りてきた。頭を空っぽにして走るジョギング中は、実にインスピレーションが降りてきやすい。

今回、その降りて来たついでに、そのまま心中で「走りながら」大体の執筆を済ませてしまったこともあった。『ネチェリケト』の「銀河鉄道の夜」の話などは、まさにその典型である。スルスルと進む執筆は、本当に楽しいものである。

最後に、この三部作が、読者のなかにおける「ヘルメスの杖」の実在感を高めてくれることを祈念して「ヘルメティック・トリニティ」の筆を置くことにしよう。

# 付録

## 茨城県知事選挙に関して

### 再生エネルギー事業

参議院選挙で参政党が大いなる躍進を見せてすぐ、茨城県の知事選があった。茨城県に住んでいる私にとっては、直接自分の生活に関わってくる選挙である。

現職の知事は大井川和彦氏。今回の知事選は、彼にとって三期目を狙う選挙となる。

しかし、この大井川氏には大きな問題がある。週刊誌で報じられたパワハラ問題も気になる場所ではあるが、それより何より、もはや隠そうともしない彼の「媚中姿勢」こそが問題なのだ。

まずは再生エネルギーの話から始めよう。

茨城の道路を車で走っていると、そこいら中で太陽光パネルを見ることになる。山を切り開いて、木々を根こそぎにし、その土地に太陽光パネルを敷き詰めたものだ。そして、それを推進してきたのが、他ならぬ大井川知事なのである。

環境保護を名目にした森林破壊にも腹が立つが、なお腹立たしいのは、この太陽光パネルの製造元が、九割以上「中国製」だということである。

つまり、このパネルを買えば、その金は、日本ではなく中国経済を豊かにするのである。しかも、そのパネル購入資金は「再エネ賦課金」という名目で、国民からの税金として吸い上げられているのだ。

ようするに、国民から搾り取った金によって中国の製品を買う。それにより販売元の中国を潤わせる、というのが「太陽光パネル・ビジネス」の構造なのである。

こんなことが日本人に許せるはずがない。

### 国籍要件の撤廃

しかも大井川氏は、県庁における国籍要件を撤廃してしまった。これは要するに、外国人が県の事務職に関われないようにした条項（＝国籍要件）を無効化したということだ。いまや外国人でも県庁の事務員になれるのである。

そうなれば、中国人が直接、事務的に「茨城県のこれから」を操ることも可能となる。それは最悪の場合、茨城県庁から始まる、中国による日本侵略のムーブメントとなるだろう。中国はこの動きを泣いて喜ぶはずである。

そして、ここまでの媚中姿勢に対して、中国側は、大井川氏に見返りとしての「パンダ」を送ろうとしている。パンダを茨城県の動物園に送り、それで周辺地域の経済活性化を図らせようというわけだ。つまり、

「経済が潤えば、パンダを中国から引き出させた大井川氏も、これまで以上に県民からの支持を得られるようになるだろう」

というのが中国側の思惑なのである。ただし、パンダをつがいで飼育すると、それだけで、年間一億円もの「レンタル料」を払わされることになるのであるが。もちろん、その一億の出どころは私たちの税金である。



大井川と中国パンダ.png

いずれにせよ、こんな中国とズブズブの現職知事を、選挙で勝たせてはならない。そう考える県民は多かったはずである。

## 地獄の二択と勇者の登場

ところが、令和七年八月の中盤まで、茨城県知事選の候補者には、この大井川氏と、日本共産党から推薦されている田中重弘氏しかいなかった。日本共産党と中国共産党、この二者がズブズブの関係にあるのは言うまでもなからう。

これが世に言う「地獄の二択」の実態である。つまり私たち県民には、中国の魔手を振り払うための選択肢がなかったのだ。

私は、参政党から立候補者が出ることを期待したが、参政党の公式見解は、「我が党には、まだ県知事選に候補者を送るほどの実力はない。よって、茨城県知事選に候補者は立てない」

というものだった。よって、ここにも「選択肢」はなかったわけだ。しかし、ここに一人の勇者が現れた。それが内田正彦氏である。

内田氏は、政治的にはまったくのノン・キャリアであった。しかし彼には、大井川知事による「国籍要件撤廃」という暴挙を許すことが出来なかった。それで自ら、県知事選の候補者として立ったのだった。ただし立候補には、三百万円の供託金の提出が義務づけられている。遊び半分で立候補することが出来ないよう、いわば金銭的な人質を取られるわけである。実際の選挙で、ある一定の得票数を得ると返金してもらえが、それに達しないと没収されてしまう。

内田氏は、我が子のための学資保険を解約することで、この三百万円を用意した。ということは彼は、私生活を犠牲にしてまで、茨城県の未来を守ろうとしたのである。

## 参政党からの離党

しかも内田氏は、もう一つの大きな犠牲を払っている。というのは。もともと彼は、参政党の党員だったのである。

しかし先述したとおり、参政党の公式見解は「茨城県知事選に候補者は立てない」というものだった。そこで内田氏は、参政党を離党した上での立候補を決意したのだ。もとより、参政党からのサポートなどは期待できない。それでも参政党マインドをもつ内田氏は、自分のポスターに「県民ファースト」の文字を刻みつけた。中国ファーストの大井川県政に対し、明確にノーを突き付けたわけだ。

## 手作りのポスター

そういえば、急な出馬のため、右のポスターも生産が間に合わなかったらしい。

そのため投票所に、内田氏のポスターだけ貼られていないことも多かった。これを何とかしようとして、手書きのポスター（文字のみ）を、内田氏自身がコピーして生産したという話も伝わっている。

本来、県知事選のポスターは八千枚ほど必要だった。だが内田自身、ポスター貼りの協力者を想定しておらず、自分で貼れそうな枚数（二千枚）しか発注しなかったという。そこに手書きのポスター（約四百枚）が加わっても、やはり全然数が足りなかった。

いや、ポスターだけの問題ではない。なにぶん、内田氏が立候補を決めたのが、公示日ギリギリのことだったのだ。

そのため全般的な準備不足は否めず、選挙戦は苦しい戦いとなった。尻上がりに選挙活動は盛り上がっていったが、それにもやはり限界があったようだ。

## 内田氏の落選

たしかに投票日前日の「河合ゆうすけ・フィフィによる応援演説」は、大いに盛り上がった。多くの県民が守谷駅に集結し、その情景は壮観なものとなった。

しかしながら、結果的に、大井川知事の再選を阻むことは出来なかった。

三十パーセント台という投票率の低さも悔しいが、これから四年間の悪政が続くかと思うと、本当に暗澹たる気持ちになる。

しかし、内田氏自身の勇気と努力は、大いに讃えておきたい。本当に尊敬せずにはいられない人だし、本当に「ありがとうございます」と言わずにはいられない人だ。彼は本当に政治的英雄と讃えられていい人物だと思う。

さいごに、気を取り直して考えてみよう。

私たちに出来るのは、いまや国政から県政を変えることだ。参政党が政府与党になれば、各県政の媚中姿勢も、さすがに矯められずにはおかれまいだろうから。したがって、次の衆議院選挙がことさら注目されるのである。



---

ヘルマプロデイツII

---

著 者 正道

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---